スライド説明会資料

平成 29 年 5 月 21 日（日）

十宮古里遺跡（第６次発掘調査）

所 在 地　鈴鹿市十宮四丁目１１０６　外１０筆
事業主体　鈴鹿市教育委員会
調査目的　宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の記録保存
調査期間　平成２８年７月１２日～平成２８年１１月３０日
調査面積　２，０３４㎡
調査主体　鈴鹿市
調査担当　吉田　隆史
調査協力　株式会社二友組

図１　十宮古里遺跡と付近の主な遺跡位置図

※国土地理院地形図２万５千分の１「鈴鹿・亀山」を使用（任意縮尺）

◆１　位置と環境（図１）

十宮古里遺跡は，鈴鹿市十宮四丁目地内を中心として周知されており，行政区分上の河曲地区に該当する。「河曲」との名称は，鈴鹿川が東方の下流域へ向け，大きく蛇行しながら流れる様子を形容したものと考えられている。鈴鹿川中流域の左岸が標高 30 ～ 40 m程度の丘陵地形を呈するのに対し，右岸には鈴鹿川の谷底平野が広がり，旧河川によって形成された低位段丘が存在する。調査地は東西約 1,000 m×南北 400 mの島状に独立した低位段丘とその縁辺部に立地し，標高は約 10 mを測る（図 1）。この地域は古くから開かれたものと考えられ，人々による営みが連綿と確認されている。

十宮古里遺跡が始まる弥生時代後期～終末の頃には，鈴鹿川左岸段丘上の磐城山遺跡及び一反通遺跡，南 山遺跡，青谷遺跡等にて集落が経営される。右岸低位段丘上では，十宮古里遺跡で多数の良好資料を含む大溝と 5 基の方形周溝墓が検出されている。また，十宮古里遺跡の東側に隣接する萱町遺跡においても，赤彩された土器が出土している。

古墳時代前期における集落の様相については，不明な点が多く，右岸谷底平野の八重垣神社遺跡で集落及び墓域，宮ノ前遺跡で集落が部分的に確認されている程度である。河川の氾濫等の影響によって，失われてしまった可能性が高い。左岸段丘上には多くの古墳が現存し，古墳時代をほぼ通じて墓域としての性格が濃い。鈴鹿川を臨む丘陵端に位置する寺田山 1 号墳は，鈴鹿川流域で屈指の規模を誇る前方後円墳であり，この流域を支配した有力君主の墳墓であるものと想定されている。後続する富士山 1 号墳も全長約 50 mの前方後円墳である。左岸段丘上には，中～後期に比較的小規模の古墳が点在し，後期には磐城山遺跡や境谷遺跡にて集落が経営されるようになる。右岸では河田宮ノ北遺跡や宮ノ前遺跡の旧河道から，中～後期の遺物が多量に出土しており，後期には十宮古里遺跡で竪穴住居が確認されている。

古代律令期においては，この地方は河曲郡に該当する。左岸段丘上に河曲郡衙推定地の狐塚遺跡，伊勢国分寺・尼寺を始めとして，白鳳寺院が推定される南浦遺跡，計画的な配置状況を示す掘立柱建物群が検出された木田坂上遺跡等の重要遺構が密集しており，郡の中心地であったことが分かる。対して，右岸低位段丘上では，萱町遺跡で 7 ～ 8 世紀代の遺物が出土し，9 世紀代のものが比較的まとまる程度である。十宮古里遺跡では，7 世紀後半及び 9 世紀に井戸が点的に検出されている。

古代末～中世前期に降る時期には，居住域を具体的に特定できるような成果に乏しい状況である。右岸谷底平野の遺跡群には複数筋の旧河道が認められ，その影響が強いものと考えられる。十宮古里遺跡では，河道が埋没した沖積地において，鎌倉期の井戸が分布する。

中世後期以降になると，左岸段丘上に織田信長軍の攻勢に長く耐えた高岡城，土塁や堀の痕跡を留める木田城が築かれる。右岸では，十宮古里遺跡から南方へ約 1 ｋm隔絶した神戸城が代表される。1,550 年代の神戸具盛の時期に築城され，約 850 m南西の沢城から移ったものと考えられているが，織豊期には信孝が入り，1,580 年の拡張時には五重の天守閣を築いたとされている。天守閣は，信孝没後の 1,595 年に秀吉によって解体され，桑名城に移されている。現在でも野面積の石垣を留めているが，四方を土塁で囲み，小丘を利用した平山城であったと推定されている。十宮古里遺跡では，この頃に河道の埋没範囲に合わせるように開発が積極化したものと考えられ，低位段丘では区画を形成し，その縁辺部においても，多数の井戸が掘削される。

以上のように，この地方の遺跡は，鈴鹿川を臨む北部の丘陵から，南部の谷底平野，そしてこれに面する自然堤防上の微高地まで広く展開しており，複数の時期にまたがる重要な知見を内包している。

◆２　十宮古里遺跡と調査の成果（図２～４）

十宮古里遺跡では，過去に 5 次に及ぶ発掘調査が実施されており，今回の調査で 6 次を数える（図 2）。旧神戸中学校の敷地内においては，面的な調査が複数回行われ，特筆するべき成果が得られている。1 次調査は平成 5 年に運動場改修及び体育館倉庫建設を原因とし，平成 27 年の 5 次調査，平成 28 年の 6 次調査

は共に鈴鹿市教育委員会の旧神戸中学校跡地利用構想に基づき，学校用地の北半が売却されて宅地造成が行われることによるものである。

1 次調査は運動場の南東部に対して行い，1,200㎡を調査した。低位段丘上における調査で，代表的な遺構は，弥生時代後期～終末頃の大溝 SD1 が挙げられる。1 次調査区を南北方向に縦貫するように直線的に走り，おびただしい量の土器が器種ごとに集中して出土する傾向を示し，完形品や据え置かれたような出土状況から，水に関係する祭祀行為が行われた可能性が指摘されている。居住域は不明であるが，大溝 SD1 の東側には，同時期，そしてやや降る時期の方形周溝墓による墓域が認められる。時期を降り，古墳時代後期には竪穴住居が造られ，多量の土器が詰め込まれたように出土した溝状遺構も存在している。この時期の集落は 1 次調査区南西部から，西方にかけて分布する傾向を示している。中世～近世初頭になると，1 次調査区北～中央部を中心に井戸及び土坑等が多く確認され，土師器羽釜や陶器類が多量に出土している。

5 次調査は旧神戸中学校の教室棟及び昇降口，ポンプ室，中庭，建物周辺部分の 2,948㎡を調査した。5 次調査区は低位段丘及びその縁辺部の低地帯に立地し，井戸 32 基及び廃棄土坑 1 基，溝 6 条に加えて，複数の土坑及び流路等を確認した（図 3）。具体的な建物は見つかっていないが，多数の井戸が検出され，7 世紀後半及び 9 世紀に遡るものが 1 基ずつ，中世前期の鎌倉期が 9 基であり，中世後期～近世初頭の井戸が 21 基を占める。7 世紀後半の井戸 SE5069 及び 9 世紀代の井戸 SE5079，中世前期の井戸 SE5015・SE5073 においては，底面に木質を検出している。特に，井戸 SE5069 及び SE5073 の井戸底に据え置くように設置された木製品は，非常に重厚な作りであり，丸太材の刳（く）り抜き技法による水溜（みずため）によって，集水機能を高めていたものと考えられる。

そして，昨年に行った 6 次調査は，5 次調査区の南側隣接地にて，運動場北部の 2,034㎡を対象としている。6 次調査区は低位段丘の先端部に該当し，調査の結果，井戸 25 基及び竪穴住居 2 棟，大溝 1 条に加え，多数の溝及び土坑，ピット等を検出した（図 4）。1 次調査の大溝 SD1 の北続きとなる弥生時代後期～終末

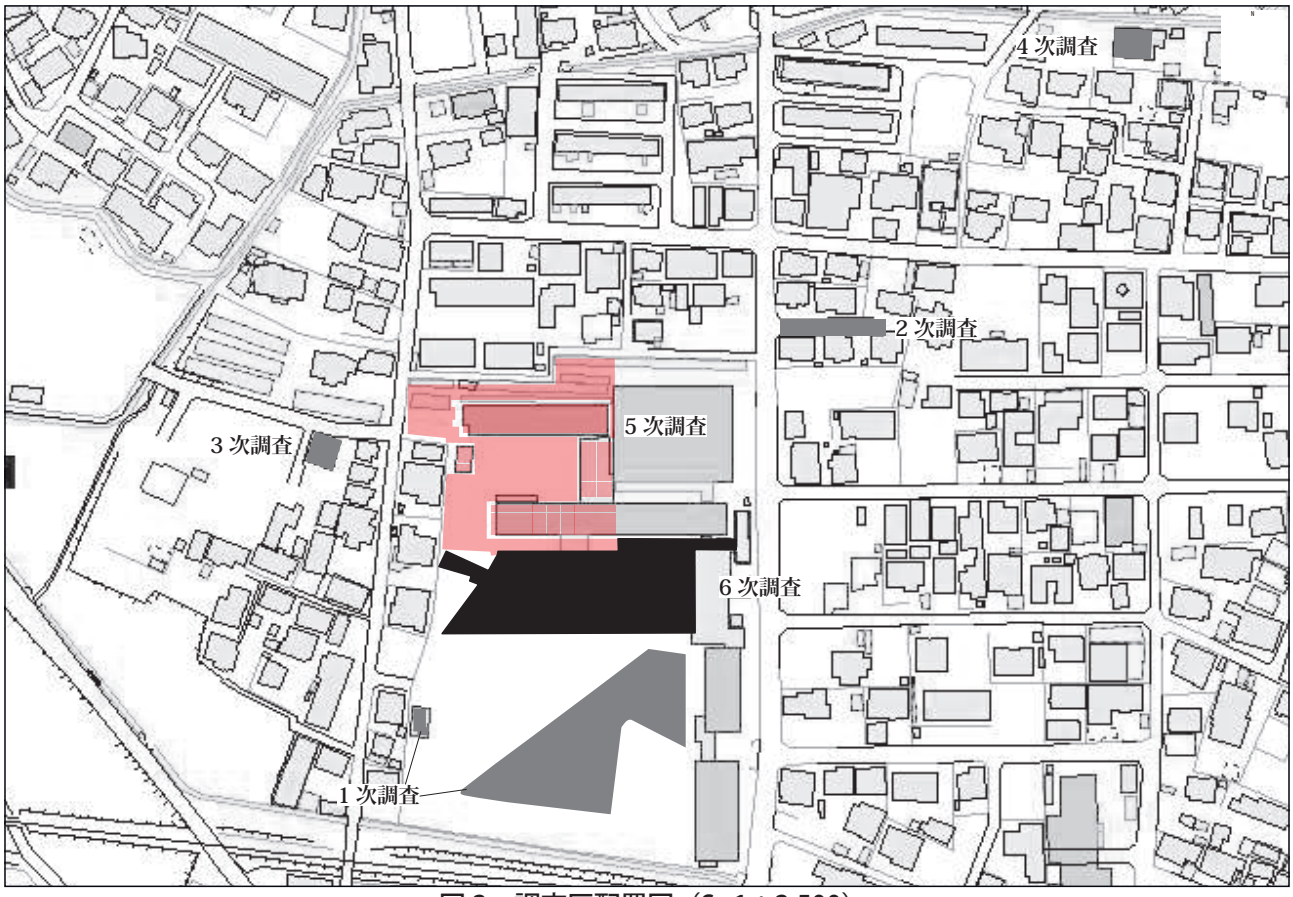


図 2　調査区配置図（S=1：2,500）

の大溝 SD6001 を始めとし，これと同時期に比定される竪穴住居 SH6002 及び土坑 SK6129，そしてやや降る竪穴住居 SH6165 の確認に至ったことは大きな成果である。しかし，全体としてこの時期の遺構密度は希薄であり，生活臭にも乏しい状況を示している。大溝 SD6001 は 1 次調査の大溝 SD1 と比較すると，上部が大きく削平されており，その影響によるものか，出土遺物もそれ程多くはなかった。破片資料が大半であり，有意な出土状況を示すような遺物も少なかった。

また，5 次調査区に引き続いて，多数の井戸が面的に展開する様相であり，近世以降に降る井戸 SE6039・SE6104・SE6105 を除いた 22 基が，中世後期～近世初頭に埋没することが分かった。中世後期～近世初頭に比定される井戸は，5 次調査区と合計すると 40 基を超過することが分かったが，その中には井戸底に木製品を用いた水溜を有するものは存在しなかった。中世前期以前の井戸に比べて，掘削深が深い井戸が多く，褐灰色礫層の下面に堆積する明黄色粘土層を掘り下げているものが多数ある。井戸底において，厚い粘土層を十分に掘削することで，安定した水脈を獲得すると共に，非常に強固で重厚な粘土を壁面とした水溜を形成することが可能となり，木製品等による特段の保護を要しなくなったものと考えられる。

この井戸が多数掘削される時期には，6 次調査区において，溝 SD6024 や溝 SD6081・93・95，そして溝 SD6115・211 等のように，東振りの N-13 ～ 20° -E 方向と，これに直交するような E-13 ～ 17° -S 方向の溝による区画が広く展開する。このような区画は，5 次調査区の低地部分では認められなかったものである。しかし，6 次調査区においても掘立柱建物等は未検出であり，区画溝と井戸との関係や具体的な居住域については不明な点が多い。

中世後期～近世初頭の遺構は，5・6 次調査区のほぼ全面に分布しており，1 次調査区北～中央部や 2 次調査区などの低位段丘上に広く配置される。5 次調査区の低地部分においても，南西部から北東及び東方向へ分岐する規模の大きい河道が埋没した後に，井戸を積極的に掘削する等，集落域を拡張させており，生活の痕跡が色濃く認められる。

◆ 3　遺物

コンテナバット（W59 × D38.6 × H20.7㎝）に 74 箱分で，合計約 290㎏の量の遺物が出土した。縄文土器及び弥生土器，土師器（はじき），須恵器（すえき），灰釉陶器（かいゆう），緑釉陶器（りょくゆう），山茶碗（やまぢゃわん），古瀬戸，常滑焼，瀬戸美濃産陶器，磁器，瓦，木製品，石製品，金属製品，銭貨等が出ている。

全体としては多数の井戸から多量に出土した土師器羽釜を始め，碗及び甕，壺，皿，鉢，瓶等の多様な陶器類など，中世後期～近世初頭のものが中心となる。

弥生土器は大溝 SD6001 から比較的まとまって出土しており，甕・壺・高坏・鉢等の他，S 字型甕及び小型壺・高坏も確認できる。また，SK6129 からは S 字型甕，P201 からは瓢壺（ひさごつぼ）が良好な出土状況で出ている。これらは，山中～廻間 I 式の段階に属するものと考えられる。

その他，縄文時代中期末に遡る資料や須恵器坏蓋・坏身・甕・壺・高坏・平瓶・ハソウ，墨書が施された土師器皿に緑釉陶器等が出土しているが，その多くは後世の遺構や表土に混入した遊離資料である。

【主な出土遺物】

①土　器：縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器

②陶　器：灰釉陶器，緑釉陶器，山茶碗，常滑焼，古瀬戸，瀬戸美濃産陶器

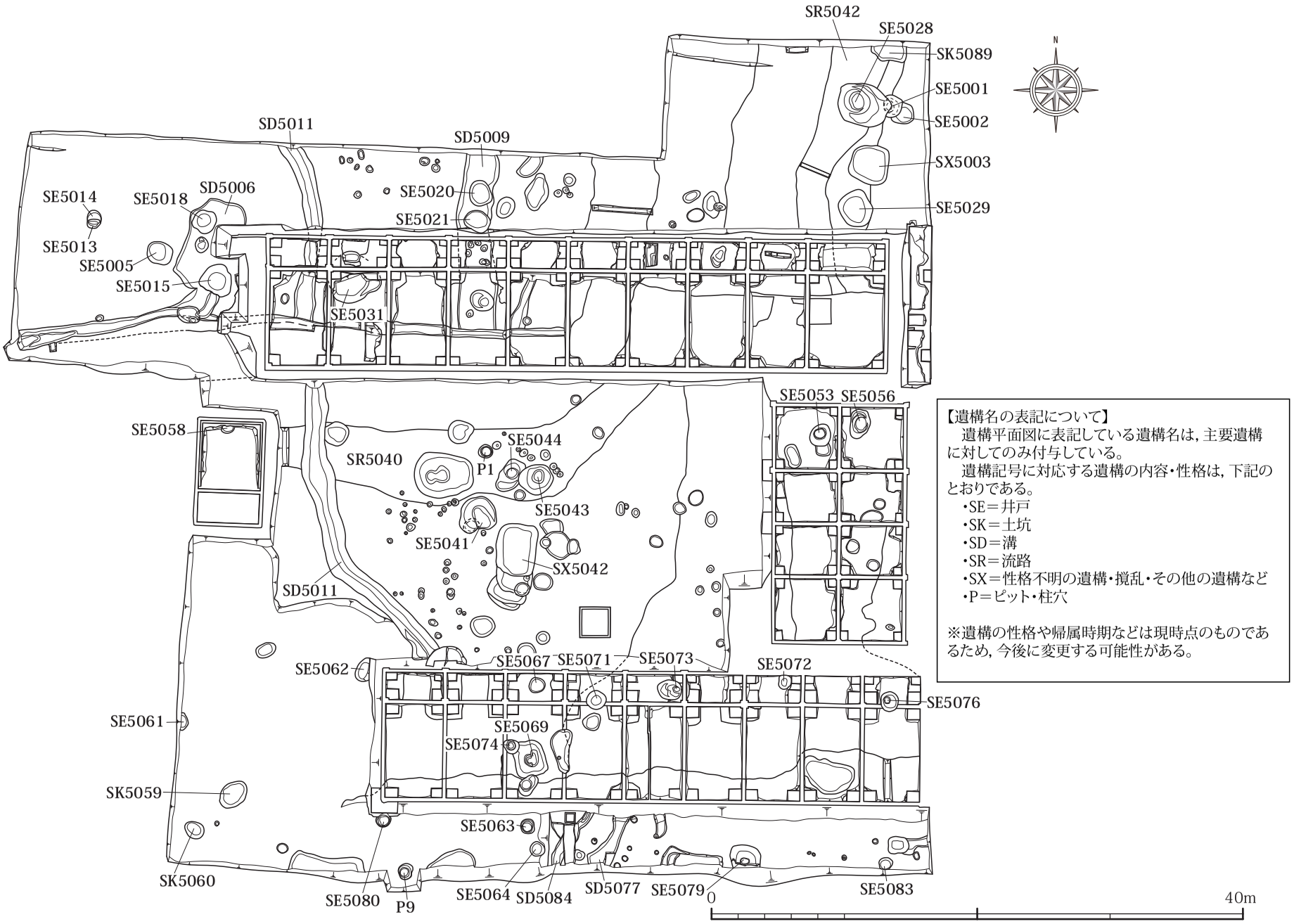
③その他：青磁，白磁，染付，瓦，石製品，金属製品，木製品，銭貨など

※備考

十宮古里遺跡 5・6 次調査の掲載内容は，全て平成 29 年 5 月 21 日現在の情報となっています。

現地調査は既に終了していますが，将来的な報告書作成に向け，遺構及び遺物の整理・検討作業を行う予定です。

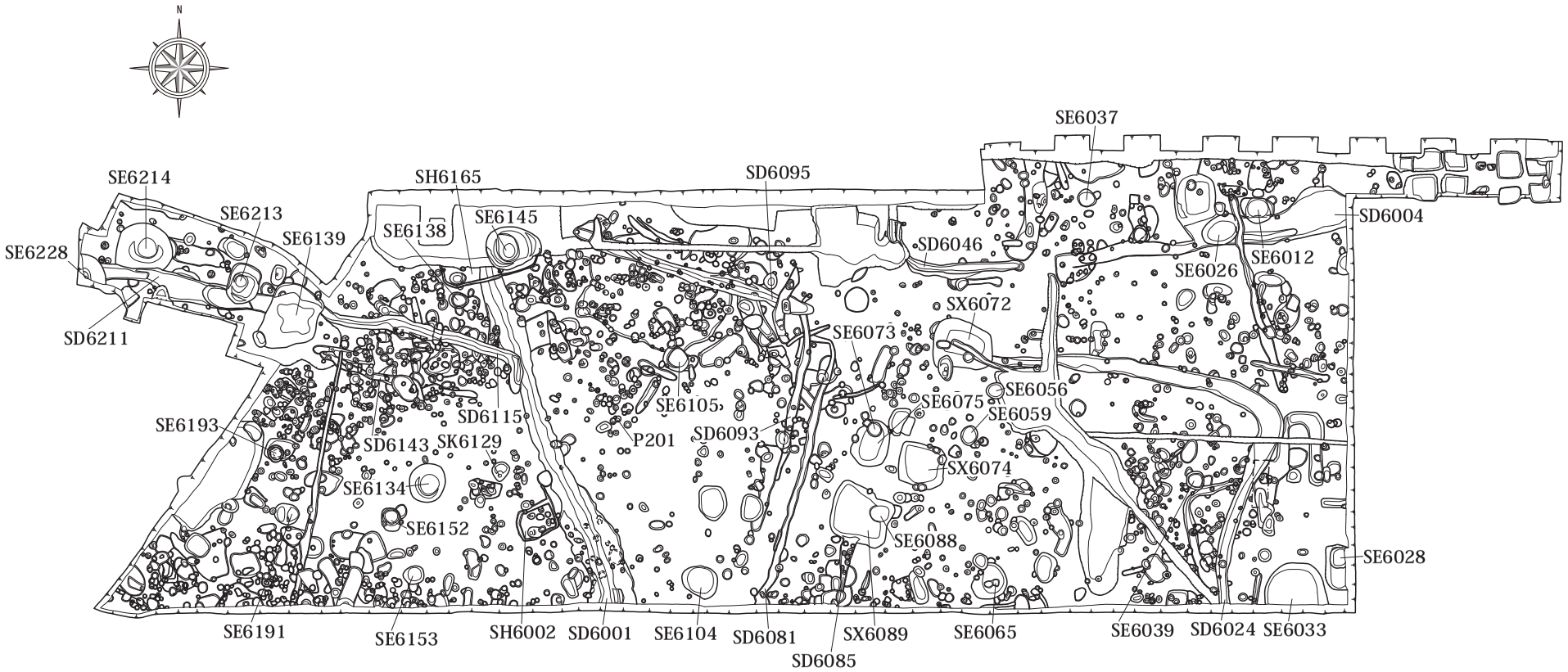
今回は現時点における調査の概略を報告させていただきますが，最終的な内容には変更が生じる点がありますことをご了承ください。



【遺構名の表記について】
遺構平面図に表記している遺構名は，主要遺構に対してのみ付与している。
遺構記号に対応する遺構の内容・性格は，下記のとおりである。
・SE＝井戸
・SK＝土坑
・SD＝溝
・SR＝流路
・SX＝性格不明の遺構・撹乱・その他の遺構など
・P＝ピット・柱穴

※遺構の性格や帰属時期などは現時点のものであるため，今後に変更する可能性がある。

図３　５次調査遺構配置図（1/400）



【遺構名の表記について】
　遺構平面図に表記している遺構名は，主要遺構に対してのみ付与している。
　遺構記号に対応する遺構の内容・性格は，下記のとおりである。
・SE＝井戸
・SK＝土坑
・SD＝溝
・SX＝性格不明の遺構・撹乱・その他の遺構など
・P＝ピット・柱穴

※遺構の性格や帰属時期などは現時点のものであるため，今後に変更する可能性がある。

0　40m

図４　６次調査遺構配置図（1/400）

調査区　全景（真上上空から）　※上が北方向

調査区　遠景（南上空から）

ピット P201 遺物出土状況（南東から）

土坑 SK6129 遺物出土状況（南西から）

竪穴住居 SH6165 出土状況（東から）

竪穴住居 SH6165 完掘（西から）

竪穴住居 SH6002 完掘（南から）

大溝 SD6001 遺物出土状況（東から）

大溝 SD6001 完掘（南東から）

井戸 SE6145 完掘（北から）

井戸 SE6152 完掘（北から）

井戸 SE6213 掘削状況（南から）

井戸 SE6213 完掘（南から）

井戸 SE6214 遺物出土状況（北東から）

井戸 SE6214 完掘（北から）

作業風景（南から）

水没状況（北東から）